

三橋鷹女全集

第三

三橋鷹女全集

立風書房

三橋鷹女全集 第二卷

一九八九年四月二十日印刷

一九八九年五月一日発行

著者 三橋鷹女

発行者 下野 博

発行所 株式会社立風書房

〒141 東京都品川区東五反田三―六―一八

電話 三三(四四七)一一九一 (営業部)

〇三(四四二)八二三一 (出版部)

振替 東京五―七四四九三

印刷所 図書印刷株式会社

(分売不可)

乱丁・落丁本は、直接小社通信販売部へお送りください。
小社送料負担でおとりかえいたします。

©T. Mitsuhashi Printed in Japan 1989

無断複製 (コピー) を禁ず。

三橋鷹女全集第二卷・目次

〈三橋鷹女論集〉

三橋鷹女私論

*

「鷹女」一望

孤鶴遠望

鷹女私記

鬼女となるべし夕紅葉

鷹女窮達談

植物のころろ——三橋鷹女小考

「連禱無限羊歯——私の三橋鷹女

鷹女さんの横顔——『白骨』の頃

鷹女俳句ひろい読み

中村苑子 二

高屋窓秋 四

飯田龍太 五

大岡 信 五

馬場あき子 五

永田耕衣 三

和田悟朗 三

折笠美秋 三

加倉井秋を 允

柴田白葉女 三

老いの意識

野澤節子 六

自縛への抵抗

稲垣きくの 二三

鷹女の向日葵を追って

八木三日女 二六

鷹女とは——『羊齒地獄』の前庭

安井浩司 二三

鷹女ノート

高柳重信 三

*

炬を踰えず

三橋劍三 二三

鷹女葬送記

寺田澄史・高橋 龍 二五

*

三橋鷹女と「紺」の時代

永田竹の春 一四

三橋鷹女と「薔薇」

高柳重信 一五

三橋鷹女と「ゆさはり句会」

三村勝郎 一五

*

『向日葵』讃

三橋敏雄 一五

句集『魚の鱗』について

松崎 豊 一六

句集『白骨』について

桂 信子 一七

三橋鷹女句集『羊齒地獄』

渋谷 道 一八

三橋鷹女句集『撫』について

飯島晴子 一九

〈年譜・初句索引〉

三橋鷹女年譜

二〇

三橋鷹女俳句作品初句索引

二〇

〔資料篇〕について

二五

三橋鷹女全集

第二卷

〔資料篇〕

装幀 中島かほる
装画 菊寿堂いせ辰
大名千代紙
「伏廻目草」

三橋鷹女論集

三橋鷹女私論／中村苑子

鷹女との出会い

三橋鷹女という女流作家の存在を私のはじめて識ったのは、鷹女が、旧姓の東鷹女を名乗っていた昭和十一年の「俳句研究」の誌上であった。その当時の「俳句研究」は、山本健吉氏の編集で改造社から発行されていたのだが、その十月号に「ひるがほと醜男」と題して鷹女が発表していた十句は、次のように何とも人目を惹く特異な作品群であった。

ひるがほや人間のにはひ充つる世に
ひるがほに電流かよひゐはせぬか
ひるがほにをとこ姪らの夢を逐ふ
鼻のない男にみえるひるがほが
ひるがほに愚かとなりてゆく頭脳
しんじつは醜男にありて九月来る
九月来る醜男のこゑの澄みとほり

九月来る醜男の庭に咲く芙蓉
九月来る醜男のかたへ明く広く
九月来る醜男が吾にうつくしい

この頃、私はまだ俳句に何の関わりも持たず、ときおり本屋の店先で「俳句研究」を購うだけの一読者にすぎなかったから、このような作品が当時の俳壇でどう受け入れられるものかなど考えてもみなかったが、私自身としては、これが定型詩としての俳句なのかといささか愕きながらも、女流でありながら、気分的なことばの粉飾などいっさい捨て去った辛辣なこの詠いぶりを、少しばかり痛快に思ったものである。しかし、好きにはなれなかった。そして、それはそれだけの事として、それ以上とくべつに作者に興味を抱いたわけでもなく、いつしか忘れ去っていた。ふたたびこの作家の名前に出会ったのは、神田の三省堂の棚にこの作者の第一句集『向日葵』を発見した時である。昭和十五年も終りに近い頃だった。

当時、三省堂から「俳苑叢刊シリーズ」として、この『向日葵』の他にも、西東三鬼の『旗』、石田波郷の『行人裡』など二十冊ばかりが、菊半截の判で定価五十銭で出ていた。いま、手許にある『向日葵』を開いてみると、

蝶とべり飛べよとおもふ掌の董
春の夢みてゐて瞭ぬれにけり
天地ふとさかしまにあり秋を病む
みんな夢雪割草が咲いたのね

おもひでのあれば水草かくは生ふ
などの句の上に○印が付いている。そしてさらに次の句々の上にも点が打ってあった。

こんとんと秋は夜と日がわれに来る

しやが咲いてひとづまは憶ふ古き映画

春愁に耐へてましろき蝶を焼く

日本の我はをみなや明治節

夏藤のこの崖飛ばば死ぬべしや

これらのしるしは、ことばの奥深い怖さなど何も知らなかったその頃の私が、おそらく好き嫌いの単純さで付けたものと思われるのだが、いま不思議に思うのは、あれほど俳壇で異色の榮譽をほしいままにし、大胆な表出と讃えられて人口に膾炙した

夏瘦せて嫌ひなものは嫌ひなり

初嵐して人の機嫌はとれませぬ

つはぶきはだんまりの花嫌ひな花

詩に瘦せて二月落をゆくはわたし

の詩句には何のしるしも付いていないのである。そしてこれは、現在の私の眼でみてもほぼ変りはない。

『向日葵』一卷を読んだ時の印象をいま回想してみると、読後の私は何ともいえずひどく物哀しかった。女として日々を生きているこの作者の、深層心理の複雑な交錯や、勝気で気儘な表現の裏に漂う女の情念の暗闇などが、同性の私の眼には生なましく透けて見え、やりきれないほど寂

しかった。

しかしながら心の片隅では、はたしてこれらの表出はこの作者の本音なのだろうかという疑念がいささか兆したことも事実だった。

それは、前に挙げた「夏瘦せて……」などの諸句に

女の香のわが香をきいてゐる涅槃

書き驕るあはれ夕焼野に腹這ひ

の二句も加えて、どこかこの作家本来の思念にはそぐわない人目を意識したナルシストの演技が感じられて、それなりの表現の小気味よさや歯切れの良さに感心はしたものの、どこことなく全面的には賛成しかねるものが心の底に蟠っていた。

だが、後になって気付いたことは、この時期に鷹女が見せていた自虐精神は、その後しだいに、自分のからだに針を打ち続ける習慣によって生じる自虐的陶醉に変化していったことや、老いや死を作品のテーマとして詠うことにより、病弱な自身に生への執着をかき立てていた事実などがあった。しかしその頃の若い私に、自虐とはすなわち自愛の裏返しであったり、老いや死を詠うことが、すなわち自分の生を荘厳することになるという逆説など判る筈もなく、ただこの作家の渾沌としたナルシズムを眩しい思いで眺めながら、今まで私にとって未知だった三橋鷹女という、不可解ながら不思議な引力を持つ作家を強烈に意識するようになっていた。

しかも、別に○印を付けた方の作品群には、じつに動転するほどの衝撃を受けていた。これが、いわゆる沈黙の文字と謂われる短詩型の俳句表現なのかと、意表を衝かれた思いで何度も読み返し、一睡もせずに夜明けを迎えた憶えがある。この時に作品から受けた衝撃の印象を、いま思い